

2024. 2. 1

29年目の1.17

忘れてはならない出来事がある

今から29年前、1995（平成7）年1月17日。阪神・淡路大震災が発生しました。日本での観測史上初の震度7。三連休明けの早朝、下から突き上げるような揺れに、私＝校長自身も明らかにいつもと違う地震だと感じました。姫路市内の中学校に向かっている途中で、壊れた家の屋根や車のまったく通っていない道路、停まったままの鉄道を見て、被害の大きさ・恐ろしさを予感し、思わず悪寒が走りました。

先月の防災学習でも紹介しましたが、北野 武＝ビートたけし氏が当時、語った言葉が忘れられません。『この震災を「5千人が死んだ一つの事件」と考えるのは死者を冒瀆してはいないか？。1人が死んだ事件が5千件あり、5千通りの死があったはずだ。1人の死は5千分の一では決してない』（確定した死者・行方不明者は震災関連死を含み6,437人）。今なら考えられませんが「姫路を含めた京阪神地方には大きな地震は来ない」と、私を含めてほとんどの人は信じ込んでいたのです。

そして、2011（平成23）年3月11日、東日本大震災が発生しました。この地震が発生したとき、今の中学生は全員、小学校入学前でした。地震・津波等による死者・行方不明者2万2千人以上（震災関連死を含み、未確定）。同時に発生した福島第一原子力発電所の原子炉爆発にともなう放射能汚染等により、今も県外への避難生活を強いられている＝そうするしかない方が、福島県だけで2万人以上おられます（2023年11月1日現在）。そして今月は、これら未曾有の大震災の狭間に当たる月です。二つの大災害は、たくさんの方を私たちに教えてくれています。

29年前、兵庫に暮らす私たちや私たちの父母・祖父母・家族・親戚・友人たち、たくさんの方々が体験し、嘆き、苦しみ、悲しみの涙を流した出来事と同じことが東北地方でもおこり、まさに今もまだ続いているのです。そして平成から令和へ、毎年の

ように続くさまざまな自然災害に対して、我々人間の力はあまりに無力のように感じられます。元旦の能登半島地震でも、同じように思われました。一刻も早い救助・援助が必要です。

もちろん阪神・淡路大震災の際も世界中、全国から援助の手がさしのべられ、日本の「ボランティア元年」と言われたほどでした。しかし、私たちは「苦しさ・つらさを抱えた人の心」に本当に寄り添っているでしょうか。コロナ・インフルエンザ等の感染症流行、大きな犠牲の続く戦争状態…。そういう思いが心の中にわき上がってきます。まして、いつ、どこで、だれが被災者・感染者になるかもしれない中で「寄り添う」という言葉の本当の意味を考えることが必要です。同時に人と自然・人と人同士の関わりや、自分の将来・自身の生き方について、菅野中の生徒も先生も一人ひとりが思いを巡らさなければならないと思います。まさに他人事ではなく我が事として…。

苦しいことやつらいこと、悩むことも多い時代です。そんな時こそ「常に自分は多くの人に支えられていること」それにも増して「自分がいること、それだけで、多くの人を支えていること」を忘れず、目の前の課題をやり抜いてください。一緒に成長していきましょう。これは、みなさんへのエールであるとともに、私自身＝校長自身への戒めでもあります。学年まとめの三学期に、一人ひとりが強い思いをもって前進しましょう。

心を一つに創り上げよう！

心のふるさと われらが母校！

…私たちが生まれ、育ち、住まい、暮らし、学ぶ

筋野・上菅・菅生小校区を愛する気持ち、

そして、菅野中学校を愛する気持ちをもとう！